

乙女ゲーム世界で主人公相手にスパイをやっています 3

九月上旬 新学期がはじまりました

夏休み中、私は神社の夏祭りで起きた事件に巻きこまれて怪我をした。擦り傷がほとんどだったけれど、一時は包帯まみれ。新学期の前日である今日になっても、完治はしなかった。

夜、私は制服の長袖シャツを着てみた。まだ衣替えには早いけど、これなら腕の包帯も隠せるからね。ただ、正直暑い。

我が家に夕飯を食べに来ていた和兄は、心配そうな表情でこちらを見ている。彼は、私の従兄であり日比谷和翔という。私が通う聖火マリア高等学園で数学教師をやっている。

この世界がとある乙女ゲームの世界で、彼自身がゲームヒロインの攻略対象の一人だと告げられたのは春休みのこと。どうやら従兄殿は、そのゲームの世界に転生してしまったらしい。

和兄の前世の記憶によると、ゲームの期間は十二月末まで。それまでの間、彼がヒロインに攻略されないようにするのが私の役目だ。そのため私——新見詩織は、スパイとしてヒロインの動向を探っている。

夏祭りの事件も、ゲームイベントの一つだった。和兄は、自分のせいで私が怪我をしたと思っていろいろみたい。私の包帯を見るたびに、辛そうな表情をする。そんなに心配しなくても怪我はもうす

ぐ治るだろうし、長袖が暑いつてこと以外に問題はないんだけど。

「……明日、その格好で行くのか？」

苦々しい表情で言った和兄に、私はうなずく。

「怪我を見せつける趣味もないしね」

夏祭りの一件——私と二年D組の月島美少年が他校生とのトラブルに巻きこまれたことは、少し噂になっているらしい。最後には、警察と救急車まで来たからな。お祭りには聖火マリアの生徒もけっこう来ていたし、仕方ない。だけど、明日いろいろと聞かれたら嫌だなあ。



さて、新学期である。

委員長と私は少し早めに登校し、職員室にやってきた。

本日、席替えをやるとのことで、その準備のために和兄から呼ばれていたのだ。彼は私のクラス、一年B組の担任でもある。

短い朝礼の間に席替えをしなければならなので、私たちは和兄と簡単に打ち合わせを行った。

学級委員って大変だね。

打ち合わせの後、教室に戻った委員長と私は、席替え用の簡単なクジを作成することにした。空のティッシュボックスに折りたたんだクジを入れただけの、楽チン仕様のものだ。

「席替えか……、僕としては、後ろの席は困るんだけどね」

今は前の方の席に座っている委員長が、そうコメントする。私は首をかしげた。

「どうして？ 後ろの席の方が人気あると思うけど」

「メガネを忘れたら、黒板がまったく見えないから。教卓の前あたりを自分の指定席にしておきたいんだよ」

「委員長がメガネ外すことなんてあるの!？」

「そりゃ、僕だって寝る時は外してるよ」

委員長は苦笑する。そりゃ、そうか。委員長の顔はメガネまでセットな気がしていたので、思わず驚いてしまった。

「そっかー。たまにはメガネを外して、イメチェンしてみるのもいいんじゃない？ 目が悪いなら、コンタクトにしたら？」

「いや、やめとく。メガネがないと、僕として認識してもらえるかどうか怪しいしね」
それもどうかと。

委員長と他愛のない話をしていると、B組の生徒たちが登校しはじめた。そして、朝礼の時間。クラスにやってきた和兄は、私の方をちらりと見た。席替えの準備は終わっているか、ということだろう。私がかくりとうなずくと、和兄は大きな声で言った。

「席替えするぞー」

その瞬間、クラスがワツと沸いた。

学生にとって、席替えは一大イベントの一つだ。クラス内に気になる子がいる場合は、特に。あの子の隣の席に座りたい……なんて甘酸っぱい願望があると、そわそわしちゃうよね。私も、なんとなく落ち着かない。別に、近くの席になりたい子がいるわけじゃないんだけど。

「そういうわけなので、席替えです。席の希望については、事情がある場合のみ受けつけますが、基本的にはクジで決めます」

委員長はそう言って、用意しておいたクジの箱をみんなに見せた。

「クジを引く順番は、窓側と廊下側の最前列に座っている人でジャンケンして、勝った方からにします。僕と新見さんは、最後に残ったクジを引く予定です。ただ僕は目が悪いから、後ろの席だった場合、最前列か教卓前の人とトレードしてもらいたいんだけど、いいかな？」

教卓の前に座りたい人なんていないのか、委員長の希望はすぐに採用された。委員長、クジを引く意味が全然ないよね、それ。

さて、ジャンケンに勝ったのは、この乙女ゲーム世界のヒロインこと愛川マリア嬢だ。彼女は、廊下側の最前列に座っていたのである。うん、さすがゲームのヒロイン。……まあ、別にヒロインだからジャンケンが強いつてわけじゃないかもしれないけど。マリア嬢はさっそくクジを引き、中央列の後ろ寄りの席に決まった。

マリア嬢の席が決まると、男子生徒たちの目の色が変わった。マリア嬢の隣になれるか、さぞかしドキドキしていることだろう。何しろ彼女は学園一の美少女。お近づきになりたい男子は多いのだ。

マリア嬢の隣になったのは、彼女の攻略対象の一人、火村くんだった。彼は若きデザイナーでもある。反対側の隣の席は、同じく攻略対象である土屋少年になるかと思っていたんだけど、彼は教卓前のクジを引いていた。常日頃、デザイナーくんがマリア嬢にちよっかいをかけるのを見て、顔をしかめている土屋少年である。彼の今の心中は穏やかじゃないだろう。

なお、マリア嬢の友人である祭京子嬢は廊下側の席に、私の友人である佐々木裕美ちゃんも中央列の後方左寄りの席になった。裕美ちゃんもメガネをかけているけれど、委員長ほど目が悪くないのかな。

そして最後に残ったのは、窓側の最後尾の席と、その隣の席だった。どちらの席からも、マリア嬢の様子がよく見える。これは、授業中のマリア嬢の動向を探れと、天が私に告げているのではないかな。いや、気のせいだろうけど。

「一応、引く？」

委員長に尋ねると、彼はにっこりと笑った。

「新見さんは引いて。僕は残った方のクジを交換してもらおうから」

委員長は、教卓前の席に決まった土屋少年を見やる。私はクジを引き、窓側最後尾の隣の席に座ることとなった。

さて、九月上旬の私の仕事は、攻略対象たちのマリア嬢に対する好感度をチェックすることである。和兄いわく、乙女ゲームには好感度というものがあるらしい。これは、攻略対象たちがどのく

らいマリア嬢に好意を持っているかの目安になるものだ。

夏休みの間、マリア嬢と遭遇^{そうごう}することはあったけれど、さすがにすべての動向を探ることはできなかった。どの程度、攻略が進んでいるかを確認しないといけない。

和兄は、攻略対象たちがマリア嬢をどう呼ぶかが、好感度をはかる基準の一つになると言っていた。しかし、これがなかなか難しい。そもそも会話中でなければ分からないし、その際に必ず名前を呼ぶとも限らない。他にも、好感度が上がるとマリア嬢を見つめる表情が変化すると聞いたが、果たして私に分かるかどうか。

ひとまず今日はマリア嬢の後をつけて、攻略対象と接触した時の様子を観察してみようと考えている。

まずは一人目。マリア嬢のお隣の席になった、デザイナーくんこと火村くん。

「よろしくね、マリアちゃん」と微笑^{ほほえ}んだデザイナーくんは、一見したところ夏休み前と変化がない。呼び方も変わらないし、瞳に熱っぽいものが混じっていたりもしない。けれど、否定的な感情も伝わってこないで、順調に進行中という感じた。

授業に向けて机にノートを広げたデザイナーくんは、何か思い立ったようにマリア嬢に顔を寄せ、声をかける。私はさっそく新しい席の恩恵^{おんけい}にあずかった。ここからは、マリア嬢の様子がよく見えるだけでなく、声もよく聞こえるのだ。

「お隣になった記念に、何かプレゼントしてあげようか」
デザイナーくんが言うと、マリア嬢はくすつと笑った。

「たとえば、どんなもの？」

「そうだなあ、オレの真心^{まごころ}」

そう言ってデザイナーくんはノートを一枚ちぎり、器用に折っていく。そうして完成したのは、可愛らしいペンギンだった。デザイナーくんはそのペンギンのくちばしの先で、マリア嬢の手の甲をツンツンとつつく。

すると、マリア嬢はぷつと噴^ふき出した。「あ、これ絶対に素^すだ」という笑みを浮かべている。こういう姿を見ると、マリア嬢って本当に可愛いと思う。

「可愛いー。なんだか本物のペンギンが見たくなっちゃった……、ねえ、火村くん。よかったら今度、水族館に行かない？ ペンギン見るの、付き合ってほしいなあ」

「えー？ んー、そうだね。日曜日じゃなければ、いいよ」

くすくすと笑い合うマリア嬢とデザイナーくん。

なんというサラッとした誘い方であることよ。これって、あれかな。和兄が言ってた、ヒロインと攻略対象の友達デートってやつ？ 教室で、なんとまあ大胆な。

ちらりと横の席をうかがうと、土屋少年は自分のカバンをあさるのに必死で、二人の様子に気づいていないようだった。教科書が見当たらないのだろうか……？ っていうか、どれだけ乱雑に入れているんだ。普段から中身を整理しておくことをすすめたい。

次の観察対象は、そんな土屋少年である。

二時間目の休み時間、マリア嬢は土屋少年の席の近くにやってきた。彼女の姿を見て、土屋少

年は少し嬉しそうに声をかける。

「よう愛川。……夏休み中は、わざわざありがとな」

「ううん。つくくんがインターハイで優勝する瞬間が見られてよかったよ。前の大会の時には、応援ができなかったから」

マリア嬢は土屋少年の前の席に座ると、はにかんだように笑った。

「京子ちゃんがね、スポーツ雑誌につくくんのインタビューが載ってるって見せてくれたよ。すごいね、つくくん」

「あー……インターハイ特集だったからだよ。優勝者のみんなにインタビューしてるって言うってぞ。マイナー誌だから、たいしたことじゃ——」

「たいしたことあるよー。幼馴染が雑誌に載るなんて！ わたし、ビックリしちゃった。……でも、つくくんの口から教えてくれたら、もっとよかったのに」

少し拗ねたような口ぶりで言うマリア嬢。土屋少年は動揺したのか、慌てて口を開いた。

「い、いや、だって、インタビュ어가本当に載るのか分からなかったし……、その、見本の雑誌は家に届いたけど、発売日だって知らなかったんだ。別に内緒にしてたわけじゃねえから」

「ふふ、分かってるよ」

ふわりと微笑んで、マリア嬢は言った。

「約束、したもんね。まだまだ活躍を見せてくれるんでしょ？ 応援してるから」

「……おう」

土屋少年は頬を赤く染めて、力強くうなずいた。

二人の様子を密かに観察していた私は、さっそく今のやりとりについて考える。呼び名に変化はないし、特別進展があったようには見えないが、後退している気配もない。順調そのものといった具合だ。

ちなみに土屋少年は、八月に開催されたインターハイの水泳競技で優勝した。朝から京子嬢が雑誌を片手に宣伝していたので、私も後で見せてもらおうと思っている。

さて、三人目である。

次の休み時間、私は移動をはじめたマリア嬢の後をつけた。一年D組の教室を覗いたマリア嬢は、月島美少年が欠席していることを知って、あからさまに肩を落とした。しかし、ここでヘコたれるマリア嬢ではない。彼女は、そのまま一年C組の教室に向かった。

C組は、攻略対象の一人である桂木くんのクラスだ。ふむ、四人目は桂木くんか。

武道の心得があり、綺麗な顔立ちをした桂木くんは、クラスの女子からとてもモテるらしい。七月頃、私は桂木くんと仲を誤解され、三条さんという女子生徒から嫌がらせを受けた。彼女以外にも、たくさん女子が告白しては断られているという。

マリア嬢は、にこにこしながらC組の扉を開けた。その瞬間、三条さんをはじめとする女子たちが、一斉に彼女を睨みつける。……姿を見せただけで睨まれるとは、よほど敵視されてるな。

だが、マリア嬢はそんなことなど気にしない。桂木くんを見つけると、嬉しそうに声をかけた。

「桂木くん！」

にこやかに手を振るマリア嬢。当の桂木くんは不思議そうな顔を見ると、マリア嬢のそばまでやってきてこう返した。

「愛川、何か用か？」

「あ、ふふふつ、わたしの名前、やつと覚えてくれたんだ？」

「……？ ああ……新見の知り合いだろう」

「うーん、その覚え方はちよつとだけど……。ねえ、桂木くん。妹さんって、髪飾りとか好き？」

「……どうだろう？」

「わたしね、小さいころにいろいろと髪飾りを集めてたの。でも、使わなくなっちゃったやつがたくさんあつて。もしよかったら、妹さんに使ってもらいたいなあって思ったんだけど」

「……？ ああ」

「今度持っていきたいから、おうちにお邪魔してもいい？」

……スゴイ!! さすがだ、マリア嬢！ なんて要望の仕方だよ！

妹ちゃんの話題を出して、C組に来たのは桂木くん目的じゃないんだよ、と示しながらもおうち訪問とは！ というか、マリア嬢はどこで桂木くんの妹ちゃんと会ったんだろう。夏休み中かな。そういうば夏祭りの日には、迷子になった妹ちゃん探しをしてたっけ。

会話を聞いていたC組女子は、鬼の形相をしていた。正直言つて、怖い。

「あー……家は、ちよつと」

桂木くんの返答に、マリア嬢はしょんぼりと肩を落としてうつむいた。しかし、すぐにつこりし

て顔を上げる。

「なら、せめて妹さんに。今度持ってくるから、渡してあげてねっ！」

爽やかに手を振って、マリア嬢は教室を後にした。引き際があつさりしているところは、すごいと思う。

廊下を歩くマリア嬢は、ぼつりと呟いた。

「友好度がもう少し足りないかな。テコ入れしないと……」

うむむむ。マリア嬢、廊下の真ん中でその発言はうかつではないかね？ 私のような人間が、いつ耳を澄ましているとも限らないのだ。まあ、この学園に私のような人間が何人もいるとは思わないけど。

ちなみに、友好度もまた乙女ゲームの大事な要素の一つらしい。これを上げて攻略対象と仲良くなると、好感度も上がるんだとか。

「で、新見は何してるんだ？」

マリア嬢の後ろ姿を見つめながら廊下をゆっくり進んでいた私は、桂木くんに背後から声をかけられた。振り返ると、C組の教室の前に桂木くんが立っている。

「えっ、いや、別に。歩いてるだけだよ？」

慌てて答えると、桂木くんは少し考えこむようにして言った。

「妹が、新見にまた会いたがつてるんだ。暇だったら、今度遊びにきてくれ」

……おや？ 今まさにマリア嬢の訪問を断ったところなのに、家に私を呼んでもいいの？

私は首をかしげながら答えた。

「私も妹ちゃんには会いたいし、機会があったらね」

そんなこんなで休み時間は終わった。

午前の授業はさくさく進み、あつという間に昼休みだ。マリア嬢が向かった先は、西校舎であった。だが、彼女の目論見は外れたらしい。図書室と花壇をチェックしていたが、誰もいなかったのだ。

場所から推察すると、マリア嬢が探していたのは金城先輩に違いない。生徒会会計である金城先輩は、生徒会長である水崎先輩と一緒に、生徒会室にいると思う。だけど、私がそれをマリア嬢に教えるわけにもいかない。あくまで私は、彼女の後をつけている身。マリア嬢は西校舎をぐるっと一回りし、一年生のクラスがある東校舎へと戻っていった。五人目、六人目の攻略対象と接触するのは、諦めたようだ。

午後の授業の間は、特に何も起こらなかった。マリア嬢は、時折デザイナーさんと何か話していたが、真面目に授業を受けていた。

そして放課後。マリア嬢は中央校舎に向かった。数学の教科書とノートを持っているから、職員室にいる和兄のもとに、授業の質問をしにくのだろう。七人目は、和兄か。これで攻略対象がすべて出揃った。

こうして一日追いかけてみると、マリア嬢ってマメだなと改めて感心してしまう。

今日はこれから、文化祭についての会議がある。よって、クラスの副委員長である私は、これ以

上彼女を追うことができない。仕方がないので、和兄にメールをする。

『マリア嬢が中央校舎に向かっている。数学の教科書、持ってた』

すると、すぐに返信があった。

『了解』

見た目はホストみたいだけど、和兄はいたって真面目な教師だ。教科書持参でマリア嬢に来られたら、逃げられないだろう。このメールで、マリア嬢との遭遇が回避できるといいんだけど。

和兄にはゲームについての記憶だってあるし、マリア嬢にオトされたくないと思っている。そんな彼の好感度の確認は、私がしなくても本人が一番分かっているに違いない。

私は会議に向かうべく、移動をはじめた。

聖火マリア高等学園では、十月に文化祭がある。よって、九月はその準備期間にあてられる。

各クラスの学級委員に加えて文化祭実行委員が会議に参加し、文化祭の準備を取りまとめる。正直、目の回るような忙しさだ。ちなみにB組の文化祭実行委員は、土屋少年である。

土屋少年とは隣の席になったので、話す機会が少し増えた。まあ、まだ今日一日のことではあるけど。そして気がつけば、二人してマリア嬢の様子をチラチラうかがっていた。もちろん私はマリア嬢の様子を探っているわけだけど、土屋少年は気になる女の子について目がいってしまうという状況のようだった。彼女が楽しそうにデザイナーさんと交流しているのを見るたびに、彼は眉をひそめていた。よって、私の席の周辺は、空気がややピリピリしている。

無自覚ながらマリア嬢に夢中の土屋少年は、私が彼女をチェックしていることには気づいてなさ

そうだ。今後も、なるべく気づかれないようにしたい。

文化祭の会議は長引いた。

第一回である今日の会議の内容は、文化祭規約の通達。公序良俗に反する行いをしちやダメだという注意の他に、これまでの文化祭がどんな感じであったかなどが説明された。一年生にとってはじめての文化祭である。質問がけっこう飛び交って、長引いてしまったのだ。

今後は、この会議で決めることが山のようにある。各クラスや部活の出し物・模擬店の内容、講堂や教室の使用権、当日の運営についての役回りなど……気が遠くなりそうだ。

まずは次の会議までに、クラスの出し物の希望をまとめて、提出しなければならない。それが決まると、各クラスや部活で文化祭の準備に取りかかることができる。

出し物・模擬店の希望は、無条件に通るわけではない。その年ごとに規則が定められていて、それに反することはできないのだ。毎年似たような内容だけど、食中毒が世を騒がせた翌年には、飲食系の模擬店の規則がものすごく厳しくなって、希望は激減したそう。

また、文化祭は文化部にとって年に一度の晴れ舞台。そのため、文化部の希望が優先されるらしい。クラスで出し物や模擬店の希望を決める際、内容がかぶらないように留意してほしいということで、各部の活動内容資料も配布された。とはいえ、一行でまとめられたこの活動内容が、参考になるかどうかは不明である。

さて、会議が終わると、私は委員長と土屋少年と一緒に教室へ戻ることにした。委員長と私はす

ぐ帰宅できるようにカバンを持参していたんだけど、土屋少年は教室に置きっぱなしだという。急いで帰らないといけない用事もないので、彼に付き合うことにしたわけだ。

「B組の出し物は、どうなるかな」

「そうだなあ。喫茶店を希望するクラスは多そうだよな。家庭科室の使用許可を取ったりするのも面倒だし、オバケ屋敷あたりに誘導したい」

私の言葉に、委員長がそう答えた。

「ビンゴゲームとかは？ 私、ゲームのセット持ってるんだけど」

「ビンゴだけ延々とやるのも、どうかなあ。他にも何かないと……。それにしても、どうしてみんな、あそこまでメイド喫茶に興味があるんだか」

委員長が呆れたように言う。さっきの会議で、喫茶店を希望した場合のウェイトレス衣装について、かなり質問があったのだ。ネコ耳はありか、スカートの長さはどこまで短くてもオーケーか、お客さんの手を握るのは大丈夫か、などなど。公序良俗に反する行い、とやらの基準の確認だね。

「委員長はメイド嫌い？」

「というよりも、この場合のメイドって、メイド風衣装のウェイトレスなだけだろう。『おかえりなさいませ、ご主人様』と言うだけのメイドじゃ、面白みがない。衣装を用意するのも大変だし……。新見さんのバイト先くらい本格派な衣装が見られるならともかく」

「新見のバイト？」

委員長の言葉に、土屋少年は首をかしげた。私は夏休みに、『にやんにやんカフェ』なる喫茶店

で短期間バイトをしていたのだ。かの喫茶店の給仕衣装は、ネコ耳尻尾つき。ちなみにマリア嬢も一日だけバイトをしたのだが、彼女のネコ耳ウェイトレス姿は本当に可愛らしかった。写メっておけばよかったかな。

私がマリア嬢のネコ耳ウェイトレス姿を思い出していると、委員長は携帯電話を取り出し、何やら操作して土屋少年に画面を向けた。

「これ」

「っ!? なんで持ってたんの、そんなの!？」

携帯電話の画面には、ネコ耳ウェイトレスになった私の写メが表示されていた。

「佐々木さんがくれた」

「裕美ちゃんっ!?」

そういえば、裕美ちゃんには写真を撮られていた。それにしあって、委員長にそれを送るとは……まさかの展開だよ。

「へー。似合うんじゃない？」

写メを見た土屋少年の反応は、非常に淡白だった。いや、熱く反応されても困るだけじゃ。

「まあ、そういうわけだよ。中途半端な出来のメイド喫茶をやるくらいなら、別のものがない。オバケ屋敷とか」

委員長は、再びオバケ屋敷を強調する。もしかしたら、彼は単にオバケ屋敷がやりたいだけじゃないだろうか。人を驚かせるのとか、好きそうだし。

「新見さんは、『ネオ・キャンドル』のフォローも忘れないであげてね。早めに参加希望を出さないと、講堂を使えなくなる可能性もあるし」

ちなみに『ネオ・キャンドル』とは、クラスの男子四人によって結成されたバンドである。文化祭でライブをするために、彼らは日々、練習に励んでいる。

「うん。春からずっと準備してたのに、発表できないなんてことになったら可哀想だもんね」

有志による出し物は、クラスや部活の出し物とは別枠扱いになる。文化祭では、クラスや部活の出し物の方が優先度は高い。そのため、彼らが決定した後、残りの枠は早い者勝ちで決まってしまう。参加希望紙を提出するタイミングが重要なのだ。

私がうなずくのを見て、土屋少年は不思議そうに尋ねてきた。

「そういや、なんで新見があいつらのフォロワー役なんだ？ 別にマネージャーでもないのに」

「結成した時に、たまたま同席してたからかなあ。合宿にも参加したしね」

私が言うと、土屋少年はみるみる表情を曇らせた。

「新見もいたのか」

会議前に雑談していて判明したのだが、土屋少年は、マリア嬢が『ネオ・キャンドル』の夏合宿に参加したことを知らなかったらしい。夏休み明けに漏れ聞こえた噂を耳にして、驚いたという。とはいえ七月の出来事を九月になってから蒸し返すこともできず、モヤモヤしているようだ。

「他にも京子ちゃんがいたよ。引率は日比谷センサーで。学園での合宿だったから、特に何もなかったけど」

私がそう言うと、土屋少年はホツとしたような顔をした。ここまで顔に出ているというのに、本当にマリア嬢への気持ちに自覚がないんだろうか。

「どう思う？　これ、無自覚なのかな」

委員長に小声で尋ねると、彼は私の言いたいことが分かったらしい。「どうだろうね」と呟^{つぶや}いて、笑みを浮かべた。

そうこうしているうちに教室へ到着し、土屋少年はカバンを回収した。あとは下校するのみだ。当然、土屋少年も駅に向かうのだとばかり思っていたら、彼は生徒用の駐輪場へ向かった。

「自転車通学なんだ」

「へえ。自転車通学の人、はじめて見た」

生徒の大部分は、電車がバスを利用して学園に來ている。しかし、公共機関を使うのに不便な場所に住んでいる生徒は、自転車通学をすることも可能だ。駐輪スペースに限りがあるので、四月に申請をしなくちゃいけないんだけどね。

「もしかして、トレーニングも兼ねてたりするの？」

「いや、家が駅から遠いっていうのと、満員電車が苦手なだけ」

熱心に取り組んでいる部活の延長なのかと思いきや、そんなことはなかった。

それじゃあ、と手を振り、土屋少年は走り去っていく。結局、委員長と二人で駅に向かうことになった。

のんびり歩いていると、委員長は私が長袖シャツを着ている理由を尋ねてきた。どうやら、ずっ

と気になっていたらしい。私が答えると、彼は少し痛々しそうな表情を浮かべた。

「お祭りの日は大変だったね」

「まあね……。でも、学園でいろいろ聞かなくてよかったよ」

噂になっていると聞いていたが、クラスでそれが話題にのぼることはなかった。

「ところで、あの時に着ていたのって自前の浴衣^{ゆかた}？」

「は？」

奇妙な質問だな、と私は首をかしげた。夏祭りの日に着ていたのは、菖蒲^{あもめ}柄の浴衣である。私は毎朝ジョギングしているのだが、その時によく顔を合わせるおじいさんが譲ってくれたものだ。

「そうだけど、どうして？」

「いや、前に同じ柄の浴衣を見た覚えがあつてさ。新見さんが着てるのは、ちよつと違和感があつたというか……」

「浴衣って似たような柄が多いし、同じに見えることもあるんじゃない？」

「それもそうだね。よく似合ってたし、僕の気のせいだろうな」

それにしても、違和感とはどういう意味だ。菖蒲柄は私のイメージじゃないってこと？　でも似合ってたんだよね？

「……どんな浴衣なら、違和感がないの？」

そう聞いてみると、委員長は少し考えこんだ。

「そうだな……金魚の柄とか？」

私が子供っぽいとでも言いたいのだろうか。っていうか、やっぱり菖蒲柄は似合ってたのかな。ちよっとシヨックだ。

とはいえ、金魚柄の浴衣ゆかたもいいよね、可愛いと思う。金魚と一緒に水流が描かれているデザインだと、なお涼しげだ。

「そういえば、委員長は着てなかったね。男の子って、あまり浴衣を着ないの？」

「男同士でお祭りへ行くのに、浴衣着るほど気合入れてるヤツは、そんなにいないんじゃないかな」

それもそうか。

駅前の繁華街にたどり着いたあたりで、頬にポツポツとあたるものがあつた。雨だろうか。

空を見上げてみると、どんよりと雲が広がっていて、本格的に降り出しそうな気配が漂たなっている。「激しくなるかな」

委員長は不安そうに呟つぶやいた。私は折り畳み傘を持っているから、問題ないんだけど。

「駅まで急ぐ？」

走れば、一分ほどで駅に着くだろう。とその時、委員長の肩越しに見覚えのある人影を見つけた。私は思わず目を見開く。

それは、ゲームセンターに入っていこうとするマリア嬢の姿だった。

さて、どうしようか。これは、こっそりマリア嬢の後をつけるチャンスである。状況から推察すると、攻略対象との放課後デートをしている最中なのではないだろうか。お相手は誰だ？ とりあ

えず土屋少年ではなさそうだな。

よし、委員長とはここで別れよう。そう思っていたのだが、私がうかつにもゲームセンターを凝視ぎょうししていたせいか、委員長が振り返ってしまった。

「急ぐより、雨宿りしてこうかな。たぶん、しばらく待つていれば上がるだろうから。新見さんはどう？」

彼はゲームセンターを指差して、微笑ほほえんだ。

実は私、ゲームセンターにはあまり入ったことがない。うるさそうだし、店内が暗くてタバコ臭いイメージがあつたのだ。でもこのゲームセンターは、天井が高くて明るい雰囲気だった。店先に並んでいるのはクレインゲームで、そこまでうるさくもない。委員長にそのまま感想を伝えると、彼は笑って言った。

「ああ、新見さんのイメージって、対戦ゲームなんかがずらっと並んでる光景じゃない？ ああいうゲームは、二階とか地下にあるんだよ。一階から照明を落としてると、新見さんみたいな女の子は入りづらいから」

どうやら委員長は、よくゲームセンターに足を運んでいるようだ。その後も、いろいろと説明をしてくれる。

「クレインゲームは、お店にとって大事な収入源だしね。力を入れてるゲームセンターは、カップルや家族連れも入りやすいように、店作りしてるんだよ」

詳しいな、おい。そうツツコミを入れたくなった時、クレインゲームの前に立つ二人組を発見し

た。マリア嬢と水崎先輩である。二人の前髪からは、わずかに水滴が落ちていた。

私と委員長も歩いてやってきたが、ほとんど濡れていない。なのに、一体どういう理由でそこまです濡れたのか。つくづく分からない。

私は委員長がコインゲームで遊んでいる間、二人の様子をうかがうことにした。

水崎先輩は、携帯電話を胸ポケットにしまいながら言った。

「今、車がかつちに向かっている。巻きこんで悪かったな」

「いえいえ。おかげで、水崎先輩と雨宿りできるんですから」

「……しかし、けっこう濡れてしまっただろう？」

「大丈夫ですよ。それに、先輩だってそんなに濡れて……。風邪を引かないでくださいね？」

マリア嬢は少し困ったように微笑んだ。どうやら濡れる事情があったらしい。これだけの会話では、何があったのか推察できないけど。

マリア嬢は、クレインゲームのぬいぐるみを興味深げに覗きこんだ後、上目遣いで言った。

「水崎先輩は、ゲーセンに来たことありますか？」

彼は首を横に振る。

「ないな。いつも車だから、帰宅時に寄り道はしない」

まあ、そうだろう。マリア嬢の連れが水崎先輩と気づいた時、私は心底驚いた。周囲には、いつも彼に群がっているファンクラブの女子生徒たちもない。マリア嬢がどうやって水崎先輩をここに連れてきたのか、その方法が気になる。

「なら、一度やってみませんか？」

マリア嬢の挑戦的な笑みに、水崎先輩は眉根を寄せた。

「おまえ、オレ様がこんな安物を欲しがると思うのか？」

「景品が欲しくて、やるんじゃないですよ。クレインで取るのが面白いんです。さ、どうぞ」

水崎先輩はしぶしぶといった顔で、クレインゲームに百円玉を入れた。

先ほどの委員長の説明によると、ゲームセンターのクレインゲームは、入り口付近にあるものほど難易度が高くなっているらしい。見栄えがいい景品を表に置いて、客を引き寄せる。しかし、なかなか取れないため、客はつい何度も挑戦してしまうというわけだ。

ゲームセンター素人である水崎先輩の腕前やいかに。結果、クレインはぬいぐるみに掠りもしなかった。

ええかつこしいの水崎先輩は、イラッとしたらしい。眉をひそめて、再び百円玉を投入した。しかし、またも失敗。その後、何度挑戦しても、一向に成功する気配はなかった。

そんな水崎先輩の様子を、マリア嬢はにこしながら見ている。ムキになる水崎先輩と、結果を分かっているながら見守るマリア嬢。……マリア嬢、ゲームセンターの回し者じゃないよね？

「くっ……、今のは惜しかった！ もう少しだったのに……。おい、名誉会員、これを百円玉に替えてこい。銀行くらい、まだ開いてるだろう」

高そうなブランド財布の中には、もう小銭がないらしい。悔しそうな表情を浮かべると、一万円札を数枚マリア嬢に手渡した。銀行の窓口は、とつくに閉まってるよ。っていうか、マリア嬢をど

こまで行かせる気なんだ。

「一万円札なんて渡されても困ります。何回やるんですか……。それに、そこに両替機がありますよ？」

「両替機？　こんな店の中に？　なんのためだ」

「そりゃあ、先輩みたいに熱くなった方のためです。……替えてきます、千円分でもいいですよ？」
「構わん。急げ」

水崎先輩はクレールゲームのぬいぐるみを睨みつけながら言った。目を離れたら獲物が逃げるとでも思っているようだ。

マリア嬢が戻ってくると、水崎先輩はさっそくゲームを再開する。

それから数千円を使った結果、獲物は水崎先輩の手に渡った。

大きくて、ちよつとブサイクなぬいぐるみである。水崎先輩の言うとおり、さほど質の良いものではないだろう。けれど、彼はたいへん満足そうに笑った。

「ふん。こうして見ると、なかなか愛嬌のある顔立ちをしているじゃないか。よし、おまえ、特別にオレ様の寝室に招待してやろう」

ぬいぐるみに語りかける水崎先輩。そんな彼を見て、マリア嬢はくすくすと笑った。

「カワイイとこ、あるんですね」

水崎先輩の顔が赤くなる。カワイイと言われたのが心外だったのか、狼狽した声を上げた。

「だっ、誰がだっ……」

水崎先輩の様子を見て、マリア嬢はさらに笑った。微笑ましい光景である。

その後、二人はゲームセンター前に停まった車に乗りこみ、去って行った。そういえば、先ほど水崎先輩は車が向かっていると言ってたな。こんな繁華街まで乗り入れるなんて、迷惑な車である。やたらゴツイ黒塗りの車で、ヤクザ映画に出てきそうなデザインだった。

マリア嬢の観察を終えると、私は委員長の姿を探した。果たして彼は、すぐに見つかった。太鼓のゲームで、フルコンボを達成したところだったのだ。まわりに人だかりができています。すごいな、委員長。水崎先輩とは一味違う。

それから委員長は、数回挑戦したクレールゲームですべて成功し、射撃ゲームではオールクリアをしてみせた。いったい、どれだけゲームをやりこんでいるのか。小一時間、問いただしたいほどの腕前である。

啞然とする私に、委員長は言った。

「新見さんもやる？」

「その腕前を見せられてやる気になる人間がいたら、どうかしてると思うね」

それに、お小遣いを無駄に消費するわけにはいかないのだよ。

最後まで見物に徹した私は、委員長からクレールゲームのぬいぐるみを一つ進呈してもらった。水崎先輩が取ったものと同じキャラクターのようだが、大きさはこちらの方が小さい。手のひらにおさまるサイズで可愛らしい。折り畳み傘のストラップにでもしよう。

「しかし、こんなに取れるなんて、すごいね。委員長の部屋は、ぬいぐるみでいっぱいなんじゃない

い？」

委員長のクレイニングゲームの腕前は、すさまじかった。一回のゲームで、なぜか二つも三つも取れるのだ。水崎先輩並みにお金を投入したら、いったいいくつ取れてしまうのだろう。

「部屋には置いてないな。誰かにあげたり、バザーに出したり……、ああ、そっか」

委員長はポンと手を叩いた。

「新見さん。文化祭で、これを景品にしよう」

「は？」

「家に、知らないぬいぐるみが山ほどあるんだよ。そろそろ処分しようと思ってたところだし、ちようどいい。適当な理由をつけて、景品として配ることにしようよ」

「まだ出し物が決まっていけないんだけど。景品つきって、何するの？」

しかし私の問いかけは聞こえなかったらしく、委員長はいかにすればオバケ屋敷に景品をつけられるかを検討しはじめた。制限時間内にクリアした場合に……などと、ぶつぶつ言っている。この調子じゃ、少なくともうちのクラスが喫茶店になることはないだろう。もうこの際だから、縁日の屋台でもやる？

その後、雨は本降りになり、私たちはゲームを切り上げて帰ることにした。

駅まで委員長を入れてあげようと、私は折り畳み傘を広げた。しかし、彼もカバンから折り畳み傘を取り出した。なんだ、持ってるんじゃない。しかも、私が誕生日にあげたヤツだ。

「傘、持つてるのに、なんで雨宿りしようって言い出したの？」

私が尋ねると、委員長は少し考えこんだ。

「たまにはゲームセンターで遊んでいこうかと思って。それに……」

彼は一度言葉を切り、こちらを見つめて続けた。

「新見さんをデートに誘ってみたかったんだよ」

飄々^{ひょうひょう}とそんなことを言われて、私が動揺するとも思うのか。

委員長を半眼で見返すと、彼はからからと笑った。

「冗談だよ。……この傘を持ち歩いてるの、新見さんに見られたら、ちよつと気まずいなって思っただけ」

それは先ほどの言葉よりも、よほど照れくさい一言だった。

「気に入ってもらえたなら、嬉しいけどな？」

「……新見さんは真顔でそう言うだろうと思ったから、知られたくなかったんだよ」
そつばを向いた委員長は、今度こそ耳が赤かった。



席替えをした翌日。早くも新しい席に慣れつつある。

今は昼休み。私は裕美ちゃんと一緒に、教室でお弁当を食べていた。

「そういえば夏休みに話したこと、覚えてる？ 教会の噂」

ふと思い出したように、裕美ちゃんが尋ねてきた。

「ああ……。探検に行った生徒が、帰ってこなかったっていう？」

ちよつとした怪談のような話だ。

「あれね、A組の男の子たちなんだって。行方不明になって、警察にも搜索願を出したとか。祭さんが言ってた」

「ホントに教会に行ったの？」

「そこは、ちよつと分かんないみたい」

「そんな噂があつたら、警察だつて教会を搜索してるだろうし……。それで見つかつてないなら、別の場所にいるんじゃないかな」

それにしても、搜索願なんて穏やかじゃない。京子嬢から詳しい話を聞けないかと思って、私は教室を見回した。しかし、京子嬢の姿は見当たらなかった。そういえば、マリア嬢もない。二人はお弁当と一緒に食べているはずだから、今日は外で食べているのかな。

そんなことを考えていると、デザイナーくんが話しかけてきた。

「それ、迷惑な話だよー。あの教会には日曜の礼拝で何度も行つてるけど、別に怪しいとこなんてないのさあ」

どうやら、私たちの話が聞こえていたらしい。教会の十字架が気に入っているという理由でこの学園に転校してきた彼にとつて、腹の立つ噂話なのだろう。

デザイナーくんはむくれたように口を尖らせ、私と裕美ちゃんのお弁当を摘んでいく。おい。

「だいたい夏休みでしょ？ 男がちよつと帰つてこなかったからつて、心配するもん？ 女の子と

めくるめく逃避行に出かけて、戻りたくないだけかもしれないのに」

「いや、それはそれで問題でしょ。新学期がはじまつてるのに」

私は呆れて言つた。デザイナーくんのフォローは、ちつともフォローになつていない。

「オレが運命の女の子に出逢つたら、学校なんてどうでもよくなると思ふけど？」

デザイナーくんの発言には、いささか問題がある。しかし、裕美ちゃんはうつとりしながら言つた。

「火村くんは情熱家なんだねえ」

どうやら彼女の好きな乙女ドリームな世界では、それもありのようだ。

「まあ問題は、運命の女の子がなかなか見つからないことなんだけど。ねえ、裕美ちゃんはどう？ オレの運命の女の子になつてみる気、ない？」

「私、気が多い男の子つて、対象外なの」

先ほどの態度とは打つて変わつて、裕美ちゃんはキツパリ断つた。

「ちえつ。キミたちつて、このクラスで一番手強いよねえ。日曜日にも来てくれないしさ」

デザイナーくんは新しいデザイナーのヒントを得るために、隔週日曜日に会合を開いている。参加者は、デザイナーくんファンの女の子たち。彼は男女問わずに誘っているが、実際に行くのは女の子だけだという。私と裕美ちゃんも、誘われたことがある。顔を出したことはないけど。

「日曜日は忙しいからムリ」

またも裕美ちゃんは、バツサリと切り捨てた。強いな、裕美ちゃん。

とその時、京子嬢が会話に加わってきた。

「火村くん、フラれちゃったわね」

そう言つて、面白そうに笑っている。マリア嬢も一緒だ。どこへ出かけていたのかは分からないが、戻ってきたところらしい。二人と入れ替わるようにして、デザイナーくんが離れていった。他の子のお弁当を摘みにいったのだろう。彼は毎日、いろんな子のお弁当を味見しているのだ。

ナイスタイミングである。せっかくなので、私は京子嬢に教会の噂について尋ねることにした。

「夏休み中に、裕美ちゃんから聞いたんだけど……」

私が切り出すと、京子嬢はシリアスな表情を浮かべて、噂の詳細を教えてくれた。

どうやら怪談話と、A組の生徒が行方不明になっていることは、別件であるらしい。

「あの教会に何か秘密があるっていうのは、前からあった噂なのよ。時々、ヴァイオリンが聴こえてくるのも怪談っぽい要素だったし」

そのヴァイオリンを弾いているのは、月島美少年だ。みんなは知らないようだけど。

「あの教会には住み込みの神父がいるんだけど、普段、彼の姿がまったく見えないの。日曜の礼拝には出てるようだから、そこまで怪しくはないんだけどね。それでA組の男子生徒四人が、夏休み前に教会を探検しようって話をしてたんだって。とはいえ、本当に教会に行つたのかは分からないみたい」

「探検するほど大きな教会だっけ、あそこ？」

私が尋ねると、京子嬢は首を横に振った。

「ううん、むしろ小さい建物よ。でも関係者以外立ち入り禁止の場所だから、入ってみたくなる気持ちには、よく分かるわ」

それは、確かに。男の子たちの好奇心を煽りそうだよな。

「四人が行方不明になっているのは、本当よ。ただ、教会は無関係だと思う。大人たちは、何か事件に巻きこまれたんじゃないかって話してるわ」

そう言つて、京子嬢は腕を組んだ。

「まあ、教会は一度取材してみたいと思ってるんだけどねー」

さすが報道部。私が感心していると、マリア嬢は不安そうに口を挟んだ。

「う、うーん。危ないかもしれないから、やめておいた方がいいんじゃないかなあ……行方不明者の噂がある場所なんだし……。本当に無関係かは、分からないじゃない？」

マリア嬢にとって、教会は月島美少年と遭遇できる場所。あまり好奇の目が向けられるのは、避けたいのかもしれない。

「マリアってば、こういう時、絶対に乗ってくれないわよねえ。ま、残念だけど諦めるかな」

京子嬢はそう言つて、肩をすくめた。けれど彼女の目がきらりと光ったような気がして、私はふと嫌な予感を覚えた。

翌日、京子嬢は学園に来なかった。

朝礼の際、京子嬢が席に座っていないことに気がつき、私は眉を寄せた。裕美ちゃんも同じことを考えていたのか、心配そうな表情を浮かべて、私の席を振り返る。

あんな噂話をしていて翌日だ。体調不良で欠席しているのならまだいいが、疑問は残る。和兄は首をかしげてマリア嬢に尋ねた。

「祭から欠席の連絡がないんだが……愛川、おまえ仲がいいだろう。なんか聞いてないか？」

「え、ええっと……。風邪を引いて休むって言ってみました」

マリア嬢はしどろもどろになって答えた。怪しい。

「そうか。病欠なら、ちゃんと連絡してほしいもんだな……。まあ仕方ない、後で自宅に電話してみるか」

和兄はそう言っ、朝礼を終えた。それからすぐに別の教師が現れて、一時間目がはじまってしまった。授業中、私は京子嬢のことが気になって仕方なかった。

一時間目が終わると、すぐに裕美ちゃんが私のもとへ走ってきた。顔が真っ青である。

「し、ししし、詩織ちゃん。まさか」

私はひとまず裕美ちゃんを落着かせ、一緒にマリア嬢の席に向かった。

「愛川さん。京子ちゃんから風邪の連絡があつたって、本当？」

マリア嬢の顔色も悪い。私の質問に、少しくつむきながら答えた。

「明日、来なかったら風邪だって伝えてくれて……。昨日の帰りに頼まれたの」

……。やつぱり。もしかしたら、京子嬢の身に何かあつたのかもしれない。

「ど、どうしよう。まさか京子ちゃん、一人で教会に行つたんじゃ……」

くつ、マリア嬢、あなたが動揺してどうするのだ。

彼女が取り乱していることは、これはゲームのイベントとは関係ない出来事なのかもしれない。私は、ゆつくりと深呼吸をした。大丈夫、大丈夫。私は冷静。新見詩織は冷静な女だ、うん。

「教会に行つたとしたら、昨日の放課後だね。家に帰つたかどうか、自宅に確認できる？」

私は京子嬢の自宅の電話番号を知らない。マリア嬢と裕美ちゃんに尋ねると、二人は首を横に振った。

「となると、日比谷センサーに確認をお願いするしかないか……」

私がそう呟いたとたん、マリア嬢は顔を上げた。これは、何かを思いついた表情だ。先ほどまで青ざめていた顔に、少しだけ赤みが差す。

「わたし、聞いてくる！」

……。早い。一目散に駆け出していったマリア嬢に、私は啞然とした。

「よっぽど祭さんのこと心配なんだね……」

裕美ちゃんは感心したように言ったが、果たしてそうだろうか。攻略対象である日比谷教師と会話するチャンスに、喜んでいたのでは……？ 切り替え早いぞ、まったく。

数分後、私の携帯電話に、和兄からメールが届いた。マリア嬢はまだ戻ってきていない。

『夏に、肝試しのイベントがあつたはずだ。祭が取材に行ったきり帰らないのを心配し、火村と一緒に探しにいくという内容だ。夜、二人が抱き合っているイラストを覚えている。ゲーム中では、

七月から八月に起きるイベントだったと思う』

……うがああああああ。乙女ゲーム世界、鬱陶^{うつとう}しいiiiiiiiiiii！

あんなに心配したというのに！ 私と裕美ちゃんに謝れ！ こんちくしろう！

まあ何はともあれ、これがイベントだとすれば、京子嬢はたぶん無事だろう。ただ、現実のこの世界では、イベントの内容がゲームとは異なることもあるようだ。夏祭りでは怪我^{けが}をしたが、本来は負傷するようなイベントではなかったと聞いている。よって、早めに動いた方がいいだろう。嫌がらせでイベントを潰してやりたい気持ちにもなったが、それで京子嬢に何かあつては困る。やめておくことにしよう。

肝試しというと、夏の夜の定番イベントである。なぜ新学期になってからイベントが発生したのかは、分らない。まあ夏にあった合宿のイベントだって、ゲームではG.Wに発生するもの^{ジョーク}だったのだ。そういうこともあるんだろう。うん、とりあえず今が夜じゃなくて良かった。

職員室にダッシュしたマリア嬢は、予鈴が鳴った瞬間、教室に戻ってきた。そのため、京子嬢について聞くことはできなかった。

「日比谷センセから聞いたんだけど、京子ちゃんは昨日、一度家に帰った後にまた出かけたんだって」

マリア嬢がそう報告してきたのは、昼休みである。……遅いよ！ 休み時間のたびに彼女はどこかに出かけていたので、私と裕美ちゃんは、ずっと京子嬢の心配をしていた。気を取り直して、私は尋ねる。

「行き先は？」

「誰も知らないみたい」

ゲームでは、どういう内容だったんだろう。尋ねてみたいところだが、私がマリア嬢の秘密を知っていることはもちろんナイショである。私は素知らぬふりを装って確認した。

「警察には、もう届けたのか？」

「今日の夜まで連絡がなかったら、届けるつもりだったみたい。日比谷センセがおうちの人に聞いた限りだと」

「京子ちゃんの携帯電話は、向こうが出ないだけで、電源が切れてるわけじゃないんだよね？」

「うん」

マリア嬢がこくりとうなずく。

「なら……」

私は一つ深呼吸をしてから、提案した。

「教会にいるかどうか、明るいうちに探しにいけないよね」

私の言葉を聞いた瞬間、マリア嬢は目を丸くした。

おそらくイベントでは、放課後になってから、デザイナーくんと一緒に京子嬢を探すことになっているのだろう。だが、それには役者が足りない。先ほどからこの会話には、デザイナーくんが加わっていないのだ。

「え、えっと……明るいうちって？」

マリア嬢は焦ったように尋ねてくる。

「だって、暗くなってからじゃ危ないでしょ？」

私の返答には、おかしいところなどないと思う。人を探すなら、日中の方がいいに決まっている。それに、今は昼休み。絶好の機会ではないか。

……暗くなってから教会に行くのが怖いわけじゃないからね？

「まだお弁当食べてないけど、急ごう」

私はそう言って、裕美ちゃんの顔を見た。彼女も、力強くうなずく。

マリア嬢が私たちと一緒に来るかどうかは分からない。もしかしたら私と裕美ちゃんも行方不明になって、結局、マリア嬢はデザイナーさんと夜に行動するのかもしれない。

だが、今は何よりも京子嬢のことが心配だった。

私と裕美ちゃんは、教会に向かって走り出した。すると、マリア嬢も少し遅れてついてくる。

教会にたどり着くと、裕美ちゃんは「はじめて来たよ……」と呟いた。

あちこちに修繕が必要そうな、古い建物である。周辺には木々が生い茂り、まだ昼だというのに薄暗い。

重厚な扉には、『関係者以外立ち入り禁止』の張り紙がしてあった。近づいてみると、扉が少し開いている。中に誰がいるのかもしれない。裕美ちゃんの方をうかがうと、青ざめた顔をしていた。

「電話、かけてみるね」

裕美ちゃんはそう言って、京子嬢に電話をかける。

プルルル、プルルルル、プルルルル……

耳を澄ますと、裕美ちゃんの携帯電話から、かすかに呼び出し音が聞こえた。

プルルルル、プルルルル、プルルルル……

しかし、一向に繋がらない。裕美ちゃんは、首を横に振った。

仕方がない。私と裕美ちゃんが教会に足を踏み入れた瞬間、弦楽器の音が鳴り響いた。それはいつか聴いた美しい音色ではなく、とても耳障りな音だった。裕美ちゃんが、耳をふさいで膝をつく。扉の正面にある祭壇の前には、一人の少年がいた。胸をかきむしりたくなるほど歪な音を立てている彼は、この世のものとは思えないくらい美しかった。

「ひっ……」

美少年がゆっくり顔を上げると、裕美ちゃんは短い悲鳴を上げた。

「優希くん……！」

背後からマリア嬢の声が聞こえる。祭壇の前にいたのは、ヴァイオリンを手にした月島美少年だった。

「ムカツキ女。それに……ナマイキ女じゃん」

月島美少年は私を見て、ぎこちなく視線をそらした。ムカツキ女って、私のことかよ。腹の立つあだ名だなあ。ちなみにナマイキ女とは、マリア嬢のことである。

「どうして、こんなところに？」

マリア嬢は私たちを追い越して、月島美少年のもとに向かう。

「そっちこそ」

「わたしは人探しに……。ううん、それよりも今の音。どうかしたの？」

月島美少年と会話をはじめてしまったマリア嬢は置いてこう。京子嬢はどこにいる？
教会内を見回すと、床に座りこみ、壁に寄りかかってすやすや寝ている京子嬢を発見した。なん
でこんなところで寝ているんだろう。

「京子ちゃん、大丈夫？」

ゆさゆさ揺らしても起きないので、少々不安になる。寝息もしっかり聞こえてくるし、ただ寝て
いるだけだよな？ まあとにかく、見つかった良かった。

ホッと私は、裕美ちゃんに声をかける。

「保健室に連れてこう。背負うから、手伝ってもらってもいい？」

「う、うん……。でも、詩織ちゃん一人で平気なの？」

しかし、今のマリア嬢に声をかけたところで、聞こえないだろう。彼女は月島美少年に夢中だ。
もしかしたら、これもイベントの一つなのかもしれない。

二人は放っておいて、早いところ京子嬢を連れ出そう。

「つつ！」

裕美ちゃんの手を借りて京子嬢を背負おうとすると、全身に鋭い痛みが走った。……夏祭りの怪
我が影響だろうか。女子一人くらい、運べると思ったんだけど。

私が床に崩れ落ちると、いつの間にか月島美少年がこちらを見ていた。

「まだ怪我、治っていないんだろ」

彼は顔をしかめながら呟き、マリア嬢にヴァイオリンを差し出した。

「ナマイキ女、これ持ってて」

マリア嬢は、驚いた顔でヴァイオリンを受け取る。

よく見たら、弦が一本切れているではないか。よほど激しく弾いていたんだろう。とはいえ、
さっきの演奏は、どうかと思うけど。

「なあ、ちょっと」

月島美少年は私の目の前で膝をつき、京子嬢を指差した。

「そいつ、背負ってやるから、寄越せ」

正直なところ、彼のような小柄な男が、ひと一人を背負えるとは思えなかった。

しかし、月島美少年は京子嬢をひょいっと背負い上げると、思いのほかしっかりした足取りで歩
き出す。さすがに男の子なだけあるな。私たちも、その後に続いた。

「あの、優希くん。その手はどうしたの？」

マリア嬢が戸惑ったように尋ねた。その時はじめて、私は彼の手首に湿布が貼られていることに
気づいた。

「もしかして、夏祭りの時の怪我？ まだ治っていないの？ だったら、私も手伝って——」

マリア嬢が最後まで言い終わらないうちに、月島美少年は口を開いた。

「念のため。もう痛くもないし、ヴァイオリンを弾くのにも支障はない」

彼の返答に、マリア嬢は「そう……」と呟いた。

その後は特に会話も盛り上がり、保健室に到着した。

「ありがとうね」

京子嬢を保健室のベッドまで運んでくれた月島美少年に、私はお礼を述べた。すると彼は、「別に」と言って背を向けた。そのままマリア嬢からヴァイオリンを受け取り、保健室から立ち去ろうとする。私は京子嬢の様子を尋ねようと、保健室の鈴木おばちゃん先生に向き直った。

「あのさあ」

入口から聞こえたその声に振り返ると、月島美少年は顔をしかめて、保健室の扉の前に立っていた。

「あんた、女なんだから。これ以上、傷作ってんじゃねえよ。いろんなことに、首を突っこんでくんな。すっげえ、心臓に悪い！」

吐き捨てるようにそう言っ、彼は走り去った。

そんなこと、言われても……

マリア嬢は廊下に出て月島美少年の後ろ姿を見送り、保健室に引き返してきた。

うん、今はそれより、京子嬢である。しかし――

「新見さん、あなたねえ……」

鈴木おばちゃん先生は月島美少年の言葉を聞き、私がまたも怪我をしたことに気づいてしまった。制服の下に隠した包帯もバレて、彼女は呆れ果てたように首を振る。うう、なんて鋭いんだ。鈴木

おばちゃん先生は、鬼の形相で言った。

「いい加減に懲りなさい。今度は何があつたっていうんですか!」

「い、いや、その。夏休み中のことなので、ご勘弁を」

「だったら、怪我なんてしないでちょうだい! 仮にも女の子なんですよ!」

いや、ホント、ご心配おかけします。

鈴木おばちゃん先生は、大きく息を吐き出した。

「とにかく、気をつけなさいね。それより、念のため救急車を呼んだ方がいいわね。彼女、寝ているだけに見えるけど……何かあつても困るもの」

鈴木おばちゃん先生が救急車を呼んでいる間に、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。京子嬢は心配だったけれど、午後の授業がはじまってしまふ。私たちは、慌ただしく教室に戻った。

翌日、京子嬢は元気な姿で登校した。彼女は病院に運ばれてすぐ、目を覚ましたらしい。外傷などは一切なく、睡眠薬を飲まされて眠りこんでいたそうだ。

「あまりよく覚えてないのよ。家に帰った後、学園に向かって……。教会に着いたら、頭がもやもやとしたの」

「それで？」

「それだけよ。次に気づいたのは、病院。まったく失敗しちゃったわね。三人とも、助けにきてくれて、ありがとう」

京子嬢は、はにかんで笑う。その笑顔が見られて、何よりですよ。

私と裕美ちゃん、マリア嬢は、ホッと息をついた。

それにしても教会の噂について、ある意味、信憑性が増してしまった。

「ちよっと怖いから、これからはなるべく行かない方がいいんじゃないかな」

マリア嬢の言葉に、私もうなずく。

「行く必要がなければ、その方がいいよね」

そもそも関係者以外立ち入り禁止の場所なのだ。その日の朝礼でも、むやみに教会へ行かないよう厳命が下った。しかし、好奇心旺盛な高校生がそれを守るかは、謎である。

なお、さりげなくデザイナーさんに確認してみたが、夜の肝試しイベントは起きなかったらしい。マリア嬢と一緒に教会に行ったことはないと言っていた。



来月に迫る文化祭に向けて、クラスの出し物を決めなくてはならない。B組の希望をまとめるためにクラス会議を行っているのだが、これがちっとも進まない。出し物についての企画書を作って、そろそろ提出しなければならないというのに。

現在の希望は、大きく分けて三つ。一つ目は、委員長率いるオバケ屋敷。二つ目は、デザイナーくん率いる喫茶店。ちなみにこれは、メイドじゃなくてもいいらしい。三つ目は、京子嬢率いる演

劇だ。

会議が難航しているのは、司会者である土屋少年が「どうでもいい」派であることが一番の理由だろう。なんでもいから早く決めてくれ、という彼の心の声が聞こえてくるようだ。

委員長は、とにかくオバケ屋敷がやりたいらしい。人の慌てふためく姿を見たいのだとか。本性が隠せてないぞ、おい。

デザイナーくんは、要するに可愛い格好をした女の子が見たいようだ。クラスに賛同者が多いところが問題である。

京子嬢は、マリア嬢をヒロインにしたラブストーリー演劇をやりたいらしい。創作意欲に燃えている。マリア嬢も、まんざらでもなさそうだ。

結局、意見がまとまらないまま会議は終了した。今日は金曜日。続きはまた次週である。

「どうするの、詩織ちゃん。企画書の提出、今日までじゃなかった？」

「仕方ないから、『ネオ・キャンドル』の方だけ出してくるよ。あと、クラスの企画書の締切はもう少し先だから平気。まだ間に合うよ」

「そっか……。でも、どうするの？ 決まりそうにないよね」

裕美ちゃんの問いかけに、私はしばし考えこむ。

「強引にまとめるにしても、代案がないとねえ。私も週末に考えてみるよ」

ひとまず『ネオ・キャンドル』の参加希望用紙を提出するため、私は生徒会室へと向かう。

C組の前を通りかかると、こちらの会議も白熱しているようだった。廊下にまで生徒たちの声が

響いている。

「だから、和装でも洋装でもいいから、とにかく桂木くんを！」

「はい！ 執事服を着てみてほしいです！」

そう激しく主張する女子たちに、C組の文化祭実行委員が制止を入れた。

「あいつのサイズじゃ、他のヤツが着れねえだろ!? 着回しできないじゃないか！」

すると今度は、別の女の子の声がする。

「和服の方が似合うと思うんだけどなあ」

この意見には、私も賛成である。夏休みに会った時、桂木くんは和服を着ていたんだけど、あれはよく似合ってた。

「用意するの、大変だろ！ 現実見ろよ！ なんで制服じゃダメなんだよ！」

文化祭実行委員は、あちこちから出される意見に一人に対応しているらしい。他の男子の声は、まったく聞こえてこない。

「え、ええとー、桂木くんと一緒にオバケ屋敷を歩きたい……」

「願望じゃなくて、案を出してくれ！」

……大変だなあ、C組の文化祭実行委員。この分では、うちのクラス以上に苦労していそうだ。

ご愁傷さましゅうしょうさま、と思いながら通りすぎようとすると、ちょうど扉が開いて、疲れた様子の桂木くんが廊下に出てきた。どうやら会議は終わったらしい。他の生徒たちも、パラパラと教室から出てくる。

「……新見？」

桂木くんは私を見て、声をかけてきた。

「おつかれさまー。廊下まで聞こえてたよ。来週までに、まとまりそうにないねー」

私がそう言うと、桂木くんはため息をつきながらうなずいた。C組の女子たちは、桂木くんに何かしてほしいようだ。彼に希望があれば話も早そうだけど……うん、なさそうだな。

「今のところ、喫茶店が一番有力らしい。執事の衣装で……」

桂木くんが遠い目をして言った。C組は、執事喫茶の可能性が高いということか。ふーむ。

「桂木くんが執事するの？」

背が高いから、さぞ迫力のある執事になるだろう。衣装を用意するのは大変そうだけど、制服にそれっぽいベストを着てネクタイを替えたら、らしくなるんじゃない？

ところが桂木くんは、私の言葉に表情を曇らせた。気が乗らないようだ。

「執事って……爺じいさんが多いよな。そうでなくても、おじさんとか」

……うん？

「老けて見られることが多いたって、せいぜい二十代だったのに……」

……は？

目をぱちくりさせながら、彼を見上げること数秒。

……もしかして桂木くん、自分が老けているから執事をすめられてるって勘違いしてない？

本物を見たことはないけれど、確かに執事って初老の男性のイメージがある。セバスチャンとか

呼ばれてそう。でもC組の女子たちが求めているのは、たぶんそういう執事ではない。

「みんな、いつもと違う格好の桂木くんが見たいんだと思うよ。桂木くんは十代にしか見えないから、心配ないって」

私はとりあえずフォローしてみた。

「せっかくの文化祭なんだし、制服以外の衣装を着るのも面白いと思うよ。ただ桂木くんが嫌なら、ちゃんとそう主張した方がいいんじゃないかな？」

「いつもと違う……。……新見も、そうか？」

「うん？ 桂木くんはいつもの格好で、充分カッコイイと思うけど？」

思わずそう答えちゃったけど、そういう質問じゃなかったかもな。

桂木くんは私の言葉を聞いて、目を見開いた。まずい、変なこと言っちゃったか。

「……うちのクラスで出し物をするなら、いろんな服装があった方が面白くなって思ってた。でも、C組にはC組の事情があるよね」

私はそう誤魔化して、桂木くんと別れた。再び生徒会室に向かつて歩き出す。

そういえば最近、放課後に生徒会室を訪問する回数が増えた気がする。忙しすぎる委員長に代わって、書類の提出をしているからだろう。

月島先輩が生徒会長だったころは、主に委員長が書類を提出していた。六月に生徒会のメンバーが新しくなってからは、私が行くこともしばしば。生徒会室に副会長の田中先輩がいると、煎茶をど馳走^{ちそう}になって世間話をしたりする。田中先輩はメガネをかけた知的な雰囲気の子供で、私を

リラックスした気分にさせてくれるのだ。

月島先輩は優等生を絵に描いたような人で、向かい合っていると、どうしても緊張してしまう。

その点、新生徒会長の水崎先輩はいろいろとアレなので、緊張することもない。

生徒会室にたどり着き、扉を軽くノックした。以前は返事を待って入室していたが、今では気軽に扉を開けることができる。中にいたのは、水崎先輩だけだった。珍しい。

水崎先輩は生徒会長用の席についていた。机の上に肘をつき、書類に目を落としたまま、こちらを見ない。

「失礼しまーす」

気づいてないのかと思い、私は声をかけながら入室した。

書類を読んでいる水崎先輩の姿は、ファンクラブの女子生徒たちに囲まれている様子とは異なり、真剣そのもの。眉根を寄せて、難しい表情をしている。

私は書類提出ボックスに『ネオ・キャンドル』の書類を入れた。その時、わずかに乱れた息遣いが聞こえてきた。

「……っえ？」

思わず声を漏らしてしまった。少し迷ったが、私は水崎先輩にずんずんと近寄る。

すると、彼はようやく私に気づいたらしい。ゆっくりと顔を上げた。彼の頬は赤く、額には汗が浮いている。

「……先輩、熱があるんじゃないませんか？」

私が尋ねると、水崎先輩は目を見開いた。私は、彼の額に手のひらを当てて確信する。熱い。

問答無用だ。水崎先輩が手にしていた書類を奪い、机の端に寄せる。

「なっ、ちよっ……」

水崎先輩は驚いているが、そんなの気にしていられない。

「咳は出ます？ 寒気は？」

「せ、咳は、……特に」

「じゃあ、寒気はするんですね。今日、上着は持ってますか？」

「いや……」

まったく、面倒な。

「そのソファに横になってください。今、かけるもの持ってきますから」

私は、生徒会室の棚の扉をガラガラと開けた。水崎先輩は呆気にとられている。

そりゃあ、生徒会の人間でもないのに勝手に開けたらビックリするだろう。しかし、ここには毛布が入っているのだ。ちなみに和兄情報である。

毛布を取り出すと、水崎先輩はまだ椅子に座っていた。私は顔をしかめてソファを指差す。彼は、もたもたと移動した。横になった水崎先輩に、私は毛布をかける。

さてと。あとは水分を取った方がいんだろうけど、生徒会室に水道はない。ポットのお湯は、熱湯だしなあ。

「冷たい水を持ってきますから、これで汗を拭いて、少し休んでください」

ひとまず持っていたハンカチで彼の額を拭うと、水崎先輩は目を閉じた。限界だったのかもしれない。すぐに寝息が聞こえてきた。

水を汲みにいくため生徒会室を出ようとしたところ、金城先輩が戻ってきた。手には、小さなバケツとタオルを持っている。

「おや、あなたは……」

金城先輩は私の姿を見て、器用に片眉を上げた。そして、何をしていたんだと言わんばかりに、こちらをじっと見つめてくる。

……別に、おかしいことはしてませんよ？

「水崎先輩の体調が悪いようでしたので。私も、お水を取りに行こうと思っていました」

私はそう言って、金城先輩を生徒会室に引き入れた。水崎先輩がソファで眠っている姿を見て、金城先輩はわずかに目を見開く。

「あなたが運んだのですか？」

「いいえ。ご自分で歩いてもらいました。毛布は、かけましたけど」

私が答えると、金城先輩は目を細めた。

「助かりました。……先日、どこかで濡れて帰ってきたようでして。風邪を引いている自覚すら、ないものですから」

先日と聞いて私の脳裏に浮かんだのは、ゲームセンターでの光景だ。そういえばあの日、水崎先輩は前髪から滴をしたたらせていた。……あのまま、風邪を引いたのか。

相変わらず、マリア嬢のイベントは詰めが甘い。後のフォローってもんがなっていないのである。一人に集中して攻略してくれば、こんなことにはならないだろうに。

「何か、お心当たりでも？」

思わず私が考えこんでいると、金城先輩が探るようにこちらを見つめた。

「いえ。そういえば先日、放課後に雨の降った日があったなあと……」

水崎先輩を濡らしたのは、断じて私ではない。金城先輩からは、それ以上追及されなかった。

二人並んで、水崎先輩の様子を見やる。

金城先輩の目は、用が済んだのなら早く帰れと言っているような気がした。しかし、こちらもハンカチを貸した身。少しでもマシになったのを確認して帰りたい。

水崎先輩は、荒い息を吐いている。

「首元が苦しいんでしょうか」

私が彼の首元のボタンを外そうとすると、金城先輩に止められた。

「お気持ちはありがたいのですが、そこからは僕が」

そう言って水崎先輩の世話を焼く金城先輩は、子供の面倒をみる母親のようだ。ゆっくりとシャツのボタンを外していく。……なんでこの人、水崎先輩にここまで甘いんだろうか。

そんな二人の様子をぼんやりと見ていた私は、水崎先輩の胸元から覗いた物に目を丸くした。

金城先輩は、すぐにそれをインナーの下に隠した。金色の石がついた、ペンダントを。

「一年B組の、……新見詩織さん、でしたか」

金城先輩が声をかけてきた。何度か顔を合わせたことはあるが、私の名前を知っていたのか。

「はい。B組の副委員長をやっています。今日は、その書類を提出しにきました」

提出ボックスを指差すと、金城先輩は微笑んだ。裕美ちゃんが言うように、金城先輩は王子様みたいな雰囲気イケメンである。丁寧な物腰に、穏やかな笑顔がよく似合う。

「一年B組は、いつも早くて感心ですね」

「あ、すみません。今日持ってきたのは、有志の書類の方で。クラスの企画書は、もう少し後に送りそうです……。締切には間に合わせる予定なんですけど」

私は、言い訳するように言った。せっかく褒めてもらったところ、期待にそえず、すみません。

「水崎先輩、風邪なら早くお帰りになった方がいいのでは？」

私が尋ねると、金城先輩は悲しそうな顔をした。

「そういうわけにもいかないのですよ。体調管理もままならぬのかと、お叱りになる方がいらっしやいますね。意地でも学園に行きながら治す、そう息巻いていました」

まあ、結果はご覧のとおりですが、と金城先輩は肩をすくめる。

「詩織さんは、確か田中さんと同じアルバイト先にいらっしやいましたね」

……詩織さん？

私は思わず首をかしげた。これまで、金城先輩に名前を呼ばれたことは一度もない。下の名前で呼ぶ人だったのか。だとしたら、なぜ田中先輩は苗字なんだ。

内心、疑問でいっぱいだったが、とりあえず私は答える。

「ええ、田中先輩に紹介してもらいました。短期ということで、一週間だけだったんですが」

「あの折は、すみませんでした。こちらからフォローすることもできずに……」

夏休み中、バイト先の『にゃんにゃんカフェ』で変な男に絡まれた時のことだ。正確にはマリア嬢が絡まれたんだけど、巻きこまれた私は頭からキーキをかぶる羽目になった。

「あー、いえ。別に、お二人が悪いわけじゃありませんし」

「……あなたは」

金城先輩は口を開き、わずかに迷ったような表情を浮かべて続けた。

「マリアさんとは仲がいいのですか？」

私は、自分の身体が強張るのを感じた。金城先輩は、私にそれを聞きたかったのだろうか。

彼は、自身が乙女ゲームの攻略対象だとは知らないはずだ。しかし、マリア嬢が水崎先輩に近づこうとしていることには気づいている。つまり、警戒しているのだ。

「すみません。クラスメイトですが、仲がいいというほどでは……」

ウソは言っていない。私は、マリア嬢とは必要以上に仲良くならないよう注意しているのだ。

「そうですか」

金城先輩は眩^{くら}き、水崎先輩に視線を向けた。

「誉^{ほまれ}は、水崎財閥の御曹司^{おたうし}というやつでしてね」

ほほう。水崎財閥^{みづきざい}ってのをそもそも知らないの、想像はしづらいけど。

「将来、かなりの規模の財産、それに地位を継承する可能性が高いのです。誉は、妻の座を狙う女

性たちに囲まれて育ちました。彼はもともと女性好きなところがありますからね。自分をチャホヤしてくれる女性であれば、なおのこと」

水崎先輩、小さいころからハーレム状態だったのか……

「けれど誉に近づく女性たちは、いささか面倒な性格の者が多いのです。金を持っているのだから、自分に高価なプレゼントを贈るべきだと考えるような、ね。金と言っても、誉の金は彼自身のものではありません。そのため、すべて自由に扱えるものではないというのに。そこらへんが分からないようでした。結果、誉はハイエナに狙われる羊のようなものでした」

いきなり別世界の話を聞いて、私は戸惑う。金城先輩、それを私に言っただろうつもりだ。

「この学園には誉のファンクラブなるものがありますが、彼女たちはずいぶんマシな方です。誉が頭の良い女性が好きだと言え、賢くなろうと努力する。誉が雑誌を見てこんな格好が好きだと言え、それに合わせたファッションをする。まあ単純だとは思いますが、素直で可愛いと言えなくもない。誉もそんなところが気に入っているみたいです。彼女たちを喜ばせてやろうと、彼に使える金の範囲で何かする分には、僕も口出しする気はありません。ただし――」

金城先輩はそこで言葉を切り、私をじっと見据えた。

「この学園に通うレベルの女性が、誉の恋人にふさわしいとは思っていません」

いやいや、水崎先輩も金城先輩も、この学園の生徒じゃん。自分たちのことは棚に上げて、それってどうなの？

私が眉を寄せていると、金城先輩は自分の胸元からペンダントを取り出した。ペンダントの先に

は、サファイアよりもずっと深い色合いの石がついている。

私は思わず目を見開いた。金城先輩は、この石が持つ意味を知っているのだろうか。

「これは、誉の石です」

……え？

「これを僕が持っている限り、僕が認めた相手でなければ、誉の恋人にはなりません」

こ、この人……

私は寒気を感じながら、金城先輩を見やった。

「僕と誉には、奇妙な繋がりがありまして。僕たちは、生まれた時に石を握りしめていたんです。

僕は誉の乳兄弟ちちきょうだいみたいなものでしてね。この石について、僕は水崎家からいろいろと実験しけんをされました。誉で行うわけにもいきませんし、僕の両親はそれに逆らうような人ではありませんでしたから」

金城先輩は一度言葉を切ると、遠い目をした。

「……僕は、この石がどのような影響をもたらすのか知っています。これは、水崎財閥を破滅に導きかねない、とてつもなく厄介やっかいな代物しろものなんです」

金城先輩は、静かに微笑ほほえんだ。彼は、石がどのような影響をもたらすのか明らかにしなかった。和兄や桂木くん、デザイナーくんも似たような石を生まれながらに持っていたという。これは、ゲームの攻略対象である証あかしなのだ。

私は、なんのリアクションもできなかった。他者を圧倒するような空気に怯ひるんで、声も出せない。

「新見詩織さん。僕は生徒会に入った折に、全女子生徒の経歴を確認させていただきました。あなた、日比谷先生の親類だそうですね？」

「は、はあ……」

生徒会の人間ならば、教員が知っている生徒の情報くらいは手に入るのかもしれない。別に、知られたところで困ることもないけど……その追いつめるような言い方は、どうなんだ!?

「それに、あなたは体育祭で誉にフォークダンスを教えたとか。それ以来、警戒していたのです。当初は、誉にあけすけに近づいてくる愛川マリアさんこそ、警戒対象だと思っていたのですが。どうやらあなたの方が、最近さいきんは遭遇率さうぐうりつが高い」

いや、そんなことはないだろう？ マリア嬢が水崎先輩と遭遇する時、背景には私の姿があるのかもしれないけど……その程度のはずだ。それ以外の接触せつしゆと言えば、生徒会絡みの用事がある時である。私は断じて、彼の気を惹ひこうとしているわけじゃない。

しかし、金城先輩は私の方にじりじりと近寄ってくる。

「階段から落ちる、頭から水をかぶる、ケーキをぶつけられる——先日、他校生との間でトラブルに巻きこまれたと報告を受けました。気を惹こうとするにも、やりすぎでしょう。あなたには、自傷癖じしようへきでもあるのですか」

私は思わず、ブンブンと首を横に振る。そんな私の頬に、金城先輩は指を這はわせた。

ひいひいひい、触るなああああ。

しかし、彼は私の頬をゆっくり撫なでながら、冷たい視線を向けてくる。微笑んではいるが、目は

まったく笑っていないかった。

「さ、触らないでください……!」

「ホウセンカの花言葉を知っていますか？」

「っ、は……!？」

なんでここで、花言葉!?

「し、知りません、が……」

てか金城先輩、その親指はなんなの!? 頬を撫でていた彼の左手の親指は、私のく、くくく、唇をなぞるようにして、ゆっくりとうごめく。

「は、離してくださいっ!」

そんな私の悲鳴には構わず、金城先輩は続ける。

「ホウセンカの花言葉は、『私に触れないで』というのですよ。ギリシア神話に、こんな伝説があります。神々の給仕をしていた女神は、ある日、黄金の林檎を盗んだ疑いをかけられてオリンポスを追放されてしまいました。彼女は疑いを晴らそうとしましたが、無念のうちに命を落とします。そしてホウセンカに姿を変えたのです。ホウセンカの熟した実に触れると、勢いよくはじけて種を飛ばします。これは、無実を訴える女神の声だと言われているのです」

金城先輩は、目をすつと細めて尋ねてきた。

「どう思います？」

「ど、どうもこうも。き、気の毒なんじゃないでしょうか？ 無実だったんでしょ？」

